

狀部ヲ殘シテ、全部俄然九十餘尺ノ陷落ヲ受ケタリ、爲メニ壓迫セラレタル下層ノ鎔岩ハ、許多ノ裂罅小噴口ヨリ再ビ赤熱ノ鎔岩ヲ噴出スルノ美觀ヲ呈シ、新ニ鎔岩ヲモ流出シタルガ三日間ニシテ活動ヲ止メタリ、此ノ變動ノ結果トシテ第一期ノ新成岩層丘ハ破壊セラレ、高サ約六十五尺ヲ減ズルニ至レリ。

今回ノ噴火前ニ嘗テ中村博士ガ大島火孔ヲ調査セラレタル際ニ孔壁ノ下部ニ於テ一種ノ狹長ナル棧様ノ段階(第四圖)ガ存在スルヲ認メラレタリ、又平林理學士ハ富士山ノ地質調査ニ際シ、伊木理學士ハ阿蘇山ノ地質調査ニ際シテ、孔内ニ一種ノ臺地(テレース)アルヲ認メラレ、何レモ曾テ鎔岩層ガ陷落セルニ起因スベシトセラレシガ今回ハ實際ニ此ノ奇有ナル現象ヲ調査スルヲ得タルモノトス。蓋シ淺間山大噴火後ニ其ノ孔底ニ見ルヲ得ベキ鎔岩面ノ輪狀波モ原因ヲ等フシ、強キ爆發ノ爲メニ一時隆起セシメラレタル孔底鎔岩ガ次第ニ陷下セル爲メニ中央點ヨリ始メテ順次ニ圈ヲ生成スルモノナルベシ(本會歐文紀要第七卷第一號第一圖ヲ見ヨ)。

二六 岩層、丘ノ高サニ就キテ、三原噴火ノ如キ非爆發的破裂ニ際シテハ鎔岩ノ流出ハ内部ノ壓力ヲ減少シ以テ衰弱セシムルノ順序トナルベシ、而シテ鎔岩ノ流出モ噴火力衰弱モ共ニ

噴孔底鎔岩層ノ陷落ヲ促進スルノ原因トナルベキナリ。又此ノ如キ性質ノ破裂ニ於テハ、新ニ生成セル岩層丘ノ重量ガ下ヨリ岩漿ヲ噴出セントスル張力ト粗ボ平衡スベキヲ以テ、新岩層丘ノ高サニハ多少一定ノ限度アルベク、岩層丘ガ充分ノ大サニ達スレバ更ニ附近ノ個所ヨリ別ニ口ヲ求メテ岩漿ノ抛射ヲ始ムベキナリ。

第六章 大正元年九月十月

第二期ノ噴火

二七 第二期噴火ノ始メ、明治四十五年七月二十七日乃至二十九日ニ三原火孔底ニ充テル第一期ノ鎔岩層ガ俄然陷落シタル後ハ再ビ全ク靜穩トナリシニ同年(大正元年)九月十六日夕ヨリ更ニ噴火ヲ開始シテ第二期ノ活動期ニ入りタリ、今ヨリ百三十六年前ナル安永六年ノ大噴火ハ八月二十二日ヨリ始マリ十一月末迄活動セシ後一時次第ニ鎮靜シ、翌年四月二十七日ニ至リ更ニ第二期ノ噴火ヲ始メタリ、其ノ時差ハ約八箇月ニ當ル、而シテ今回噴火ノ第一期ト第二期トノ時差ハ約六箇月半ニシテ安永年間ノ場合ト相似タルモノト思ハル。

二八 噴火ノ概況、第二期ノ噴孔ハ第一期ノ分ト共ニ明治九年十年噴火ノ結果タル「ナウマン」岩層丘ニ近接セル位置ニア

リ、結局鎔岩ノ溢出スル活動ハ大體ニ於テ同一個所ニ止マルノ傾向ヲ示セドモ、第二期ノ噴出口ハ著ルシク北西ニ偏シタリ、第二期ノ噴火ハ第一期ニ於ケルト同一ノ性質ナリシガ花火ノ如クニ鎔岩ヲ噴射セル狀況ハ一層ノ壯觀ヲ増シ、孔底ニ流出セル鎔岩ノ量モ更ニ多カリキ、且ツ第一期トハ異ナリテ地ノ震動ヲ伴フコト無カリキ、要スルニ鎔岩ノ流出噴射ガ盛ナルハ即チ破裂ノ進捗ガ容易ナル所以ニシテ山下ニ火山力ノ積鬱ヲ來タサルヲ以テ、地震、微動等ヲ發生スルニ至ラザリシナランカ。

大島元村村長清水岩藏氏ノ報告ニヨルニ九月十八日ニハ鎔岩ノ噴出烈シカリシモ地動ヲ感ゼザリシト、十九日午前九時三十分ヨリ午後二時四十分迄實見ノ際モ大噴出ノ際ハ線ヲ引キ延バセル如キ鎔岩ヲ約三丈ノ高サニ吹キ上ゲ「ナウマン」丘ノ北方中央寄生火山様ノ處ヨリ多量ノ鎔岩ヲ押シ流シ居レルモ地動ハ感ズル所ナク新火口丘ハ既ニ「ナウマン」丘ト同高ニ達セリ、十六日以後ハ毎夜火光天ニ沖シ美觀ヲ極メタリ、爾後活動ヲ繼續シ、同月三十日ノ如キ噴出セル鎔岩塊ガ落下ニ約七秒時ヲ要セルモノアリ噴火ノ盛ナルハ去ル四月初旬ノ勢カト伯仲スルニ至リ、既ニ新火口ハ一個ノ山ヲ形成シタリ、十月七日頃ニ及ビテハ綿狀ノ岩漿ヲ噴出スルコト實ニ激シク

シテ破裂ノ音響元村迄聞コヘタリト云フ。

第二期噴火ハ初發ヨリ四十三日間繼續シタル後、十月二十九日午前三時頃ニ至リ終熄セルガ大島ニテハ同日午後五時頃ヨリ翌三十一日正午頃迄ニ約十三「ミリメートル」ノ氣壓下降ヲ示シ三十一日ハ大暴風雨トナレリ、斯ク一ヶ月半モ繼續セル強キ噴火ガ恰モ顯著ナル低氣壓ノ襲來ト同時ニ終リタルハ遇然ナランモ、然カモ淺間山ノ普通爆發(特ニ強烈ナラザルモノ)ガ低氣壓ノ日ニハ常ニ最小回數ヲ示スト類似現象ナルガ如シ。

大正元年十月二十九日以後噴孔ノ狀況ハ左ノ如シ

十月二十九日 曇(前夜ハ強雨)元村ニテ空氣波ヲ感ズルコト極メテ頻繁ナリ、其ノ都度山ニ對スル家ノ障子ヲ「ゴト」ト搖カシ家ヲ一回若クハ二回緩慢ニ微動セシメタリ。

十月三十日 曇、午前十時十五分山頂ニ達ス前夜ハ空氣振動次第ニ弱マリタリ、又山上ヲ望ムニ北風ニテ雲多キ爲メ赤光ヲ空ニ映ジ、盛衰ヲナセルモ「パツ」ト輝クコトハ無カリキ、而シテ本朝午前三時頃迄ニテ山上ノ赤光ハ衰滅セリ即チ此ノ時刻ヲ以テ鎔岩ノ噴出ハ終レルナリ、午後零時二十八分、同二十九分三十秒ニ稍、強キ噴出アリ、黑煙中ヨリ燒石ヲ抛出ス、蓋シ火口ヲ閉塞セラレタル爲メ時々火口縁ヨリ崩落セル

岩石塊ヲ吹キ出スモノナランカ、午後四時頃ニモ一時噴火シ赤熱鎔岩片ヲ抛出セリ、其ノ降下ノ時間ガ五秒ヲ超ユルモノモアリキ。

噴孔壁西北側斷崖ノ大裂罅ノ邊ニ至ルモ全ク震動ヲ感ゼザリキ。夜ニ入りテ川尻ヨリ孔内ヲ見下ダセルニ、同所ヨリ少コシク左手ノ孔底ハ赤熱ノ個所多ク、宛モ蜘蛛網ヲ張リタルガ如クニ連接シテキラ／＼輝キタリ、其ノ他ニモ諸所赤熱ノ點アリ、新火口丘(第二期ノ)内唇ノ一部モ赤熱ナリキ。

十月三十一日 早朝ヨリ大風雨午前八時ヨリ十時迄最モ甚ダ

シ午前十一時ニ至リ暴風雨止

ミ午後四時頃ヨリ次第ニ霽レ

暮方ハ快晴トナレリ。

十一月一日 曇、寒シ、噴火ハ

全ク靜止シ塵雲ノ如キ烟ノ噴

出モ止マリ唯ダ新岩屑丘ノ東

端ヨリ白キ蒸汽ヲ上グルノ

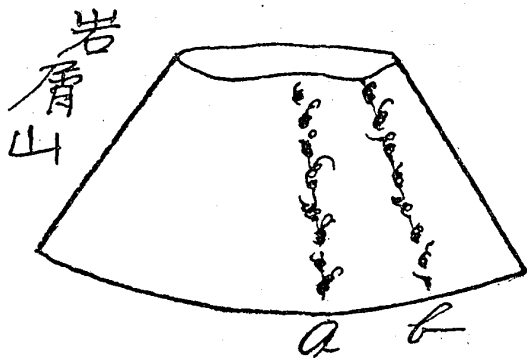
ミナリ、又新丘ノ西側面ニ三

個ノ上下裂線アリト見 其レ

ニ沿ヒテ數多ノ個所ヨリ白蒸

汽ノ玉ヲ飛散セル狀ハ頗ル美事ニシテ(第廿九圖)前日ノ大雨

第 二 十 九 圖



ニヨリ濕リ極ツタル岩屑丘ガ天日ニ乾カサル、ト思ハル、ガ如クナリキ。

孔底ノ鎔岩層ハ川尻下附近ニテハ赤熱ノ個所ヲ示サズ、所々ノ崩壞裂罅等ヨリ瓦斯逸出ニ伴フ「シユーツ」ナル音ヲモ起サズ、且ツ孔壁上部ヨリ水砂ヲ流下セルヲ以テ、孔底鎔岩層ノ周邊ハ砂ニテ充タサル、ニ至リ、鎔岩ガ熱ヲ減失スルノ速ナルニ驚ケリ。孔底ノ鎔岩層ヲ横リテ新山ノ頂上ニ登ルコト敢テ困難ナラザリキ。

十一月三日 快晴火丘ヨリ白キ蒸汽ヲ許多ノ個所ヨリ吹キ出ダセルモ頗ル其ノ量ヲ減ジタリ、火丘口ノ底ヨリモ白蒸汽ヲ立テ居レリ。

十一月四日 快晴、新岩屑丘ノ頂上ニ登リタルニ岩屑ガ「ザクザク」シ、頂部ニ近ヅクニ從ヒ足裏足袋ト草鞋ヲ著ケ居タリニ熱氣ヲ感ジ長ク止ルヲ得ザリキ。此ノ新山ノ火口ハ摺鉢ノ如キ形ヲ成シ、底面ニモ赤熱ノ個所更ニ見エズ唯ダ孔壁ヨリ白蒸汽ヲ少シク立ツルノミ。噴孔底鎔岩層ノ表面ハ殆ド全ク冷却セルモ「ナウマン」丘附近ニテハ諸處割レ目ノ中ガ赤熱ナリシモノアリ、又巨大ノ裂罅アリ深サ數間ノ谷ヲ形成シ、極メテ險阻ナル高低ノ變化ヲ呈シタリ。

二九 鎔岩及ビ岩屑丘 十月三十日ノ午前ニ實見セル際ハ恰

モ噴火ノ止ミタル直グ後ニ當リタルヲ以テ孔底ニ充テル鎔岩ハ所々盛ナル赤熱状態ニアリ、杖ヲ以テ試ムルニ格別ノ抵抗無ク、易ク刺シ通スヲ得タリ。

今回多量ニ流出セル孔底ノ鎔岩ハ鐵糞狀、粗面ニシテ第一期ノ分ト同ジク表層ハ全然破壊セラレテ、去ル七月下旬ニ流出セル光輝アリテ滑カナル鎔岩トハ頗趣キヲ異ニセリ、要スルニ第一期、第二期ノ噴火ニ於テハ鎔岩ガ急ニ流出シ且ツ多量ナルガ爲メニ自然整正ノ成層トハナラザルモ、七月末活動ノトキハ少量ノ鎔岩ガ靜カニ流出セル結果單純ナル形狀ヲ取レルナランカ。

第二期ノ岩屑丘ハ頗ル巨大ニシテ、其ノ容積ハ第一期ノモノニ比シテ十倍ノ大サニ當レリ、但シ孔底ヲ充タセル流出鎔岩層ノ容積ハ第一期ニ比シテ第二期ノ方約一・五倍大ナリキ、故ニ流出セル鎔岩ニ比シテハ第二期岩屑丘ノ方割合ニ大ナリシガ、蓋シ主要噴火孔道ヨリ鎔岩ヲ噴出スルコト容易トナリ、隣接ノ裂罅等ヨリ鎔岩ヲ壓シテ流出セシムルノ必要ヲ減ジタルナランカ、斯クテ地下ノ迫壓ヲ減ジタルノ結果、地震動ヲ發生スルニ至ラザリシナランカ。兩期ノ火口トモ明治九年十年ノ火口、即チ「ナウマン」丘ノ火口ト相接シ幾回變更セルモ遠隔ノ地點ニハ火口ヲ移スコト無カリシヲ示セリ。

第一期岩屑丘ハ高ク聳立セル第二期岩屑丘ノ麓ニ其ノ頭部ノミヲ露出スルニ至レリ(第三十四圖參照)、嘗テ八月登山ノ際杖ヲ第一期岩屑丘ノ頂上ニ樹テ置キタリシニ十一月一日ニ登レルトキ尙ホ杖ガ其ノマ、立チ存セルヲ見タリ、「ナウマン」丘ノ頂部ハ鯨背ノ如キ狀ヲ爲シテ、是レ亦僅ニ鎔岩層上ニ形ヲ止ムルニ過ギザルニ至レリ。

「ナウマン」丘附近ノ孔底ニハ黑色ニシテ輕鬚ナル鎔岩片ガ牛糞狀ヲナシテ落下シ、若クハ岩塊ヨリ垂レ懸レルモノ甚ダ多シ、平坦ナル「ナウマン」丘上ハ一面ニ「ガサ〜」ナル黑色鎔岩塊ニ覆ハレ、新造ノ火山彈(芋石)ハ無數ニ散布シ居レリ。

十月三十日ニ見タルトキモ既ニ噴孔底ノ鎔岩層ガ中央部ニ於テ多少低下ヲ明示シ、他日大陷落ノ前徵ヲ現ハシ居タリ。

第二期噴火ノ際ニ流出セル鎔岩ハ七月末ニ陷落セル孔底ノ凹ミ個所、深サ約九十尺ヲ悉皆填充セルノミナラズ、其ノ上、更ニ百尺ノ高サニ迄達シタレバ、結局第一期噴火ノ始メヨリ流出セル鎔岩ハ孔底約二百十尺ノ厚サヲ覆ヒタルコト、ナル、而シテ「第二期ノ新山」ハ頗ル巨大ナルモノニシテ鎔岩層ヨリ聳立スルコト約百三十五尺(四十一米)ニ及ビ立派ナル富士山形ヲ呈シ、其ノ容積ハ第一期新山ニ比スレバ遙カニ多キモノトス、山頂ハ圓キ摺鉢形ヲナシ、直徑約百六十八尺(五十一メート

大正元年伊豆大島三原山第二期噴火



(大正元年十月三十日大森撮影)

第三十三圖 第二期岩屑丘ノ噴孔壁上ノ北上方ヨリ望ム
 (岩屑丘ハ高さ三百三十五尺ニテ最壁低部ノ懸崖ヨリ高キ約一米ニ及ブ)

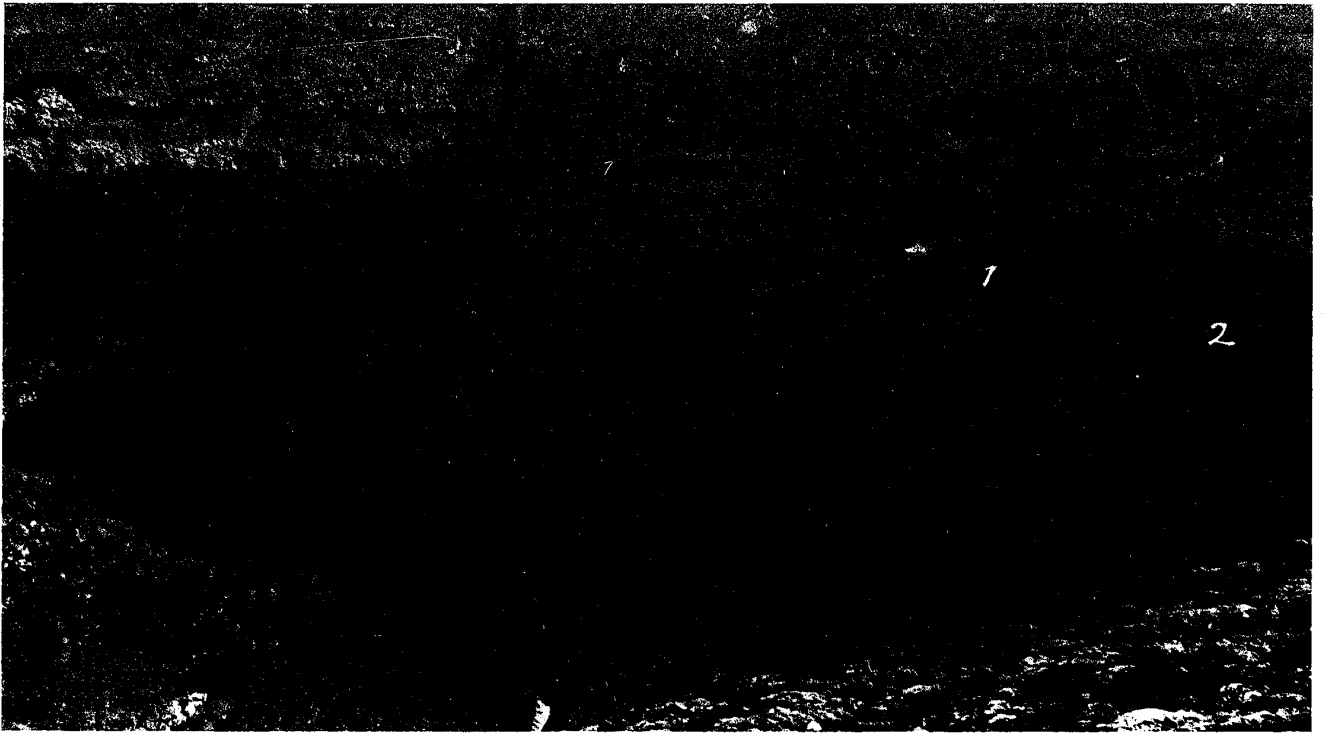


(大正二年五月七日大森撮影)

第三十一圖 但シ半年後ニ於ケル狀況

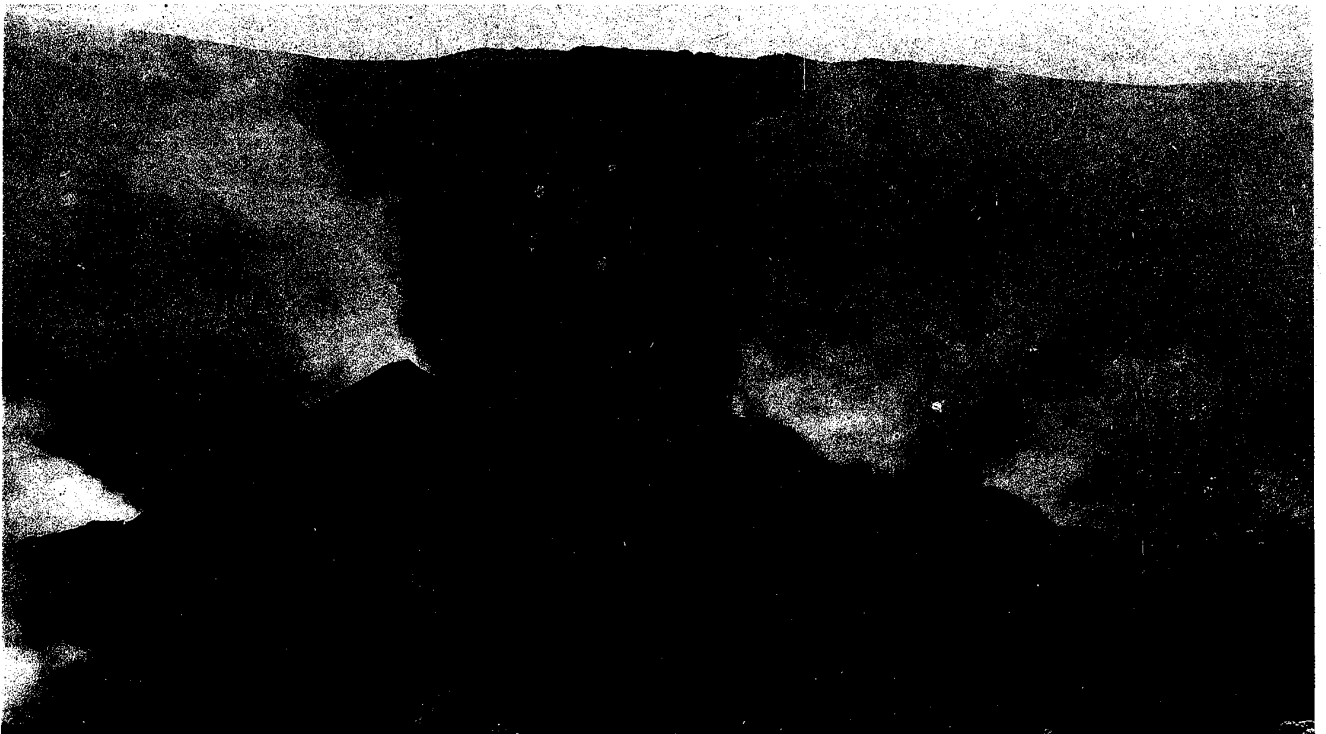
大正元年伊豆三原山第二期噴火

(大正元年十月三十日大森撮影)



第三十二圖 第二期岩屑丘(高サ三百五十五尺)ノ噴孔壁上西方ヨリ望ム
 (1)ハ第一期岩屑丘 (2)ハマシマシノ丘

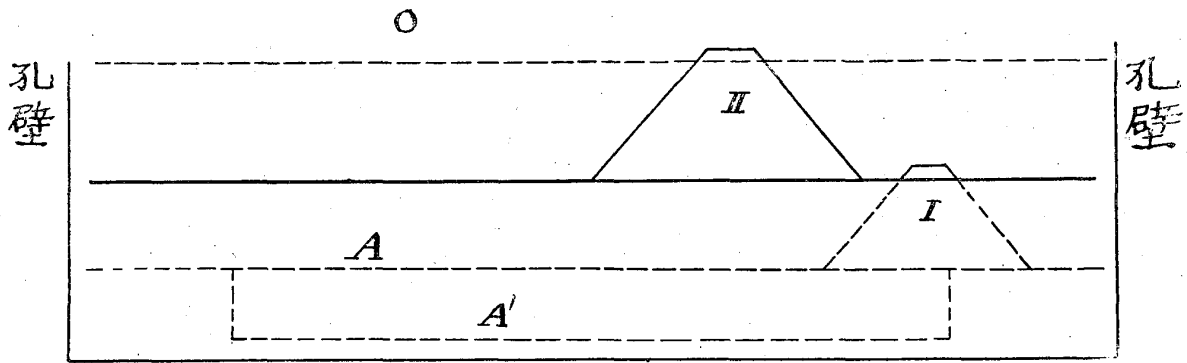
(大正二年五月七日大森撮影)



第三十三圖 但シ半年後ノ状況ナリ 同上

第三十四圖 三原噴孔斷面式圖

(大正元年十一月頃ノ狀況)

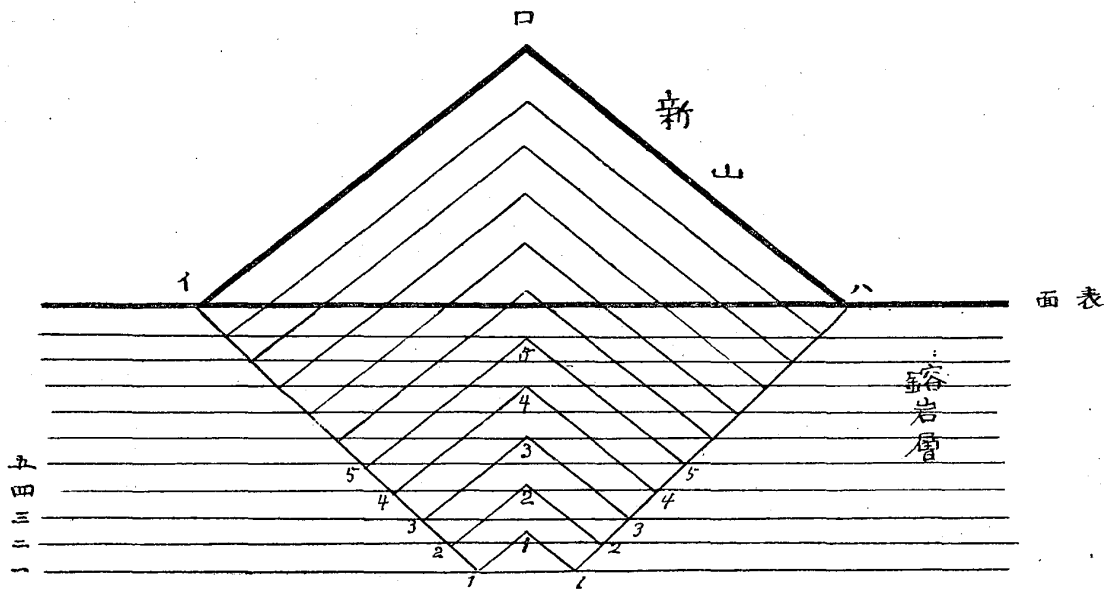


山新期二第……………II
 (ルハ現ミノ部頭)山新期一第……………I
 (リセ落陥迄A')面ノ層岩鎔ノ期一第……………A
 平水ノ所個低最壁孔……………O

ル)ニシテ山ノ側面ハ約三十四度ノ傾斜ヲ爲シ、底面ノ徑ハ約五百十尺(百五十五メト)トル)ニ達セリ、第二期噴火ノ結果トシテ明治九年十年ノ岩屑山「ナウマン」丘モ、今回第一期ノ新山(中村山)モ共ニ殆ンド鎔岩層ニ埋没セラレテ僅カニ其頭部九「メトル」内外ヲ

第八十一號 伊豆大島三原山噴火概報

第三十五圖



露出スルニ過ギザル事トナレリ、第一、第二期ノ鎔岩層ノ厚サ、新山ノ高サハ概略第三十四圖ノ如クナルベシ。
 岩屑山ノ成立ヲ考フルニ第三十五圖ノ如ク、圓錐形ノ小丘ガ次第ニ(1)(2)ヨリ(3)(4)……ト形ヲ増シ遂ニ最後ノ形狀(イロハ)トナル迄ニハ孔底ニ流出スル鎔岩層モ(一)(二)(三)……ト次第ニ厚サ

五七

ヲ増スヲ以テ結局鎔岩層上ニ現ハル、新山ハ圓錐形トナルモ其根本ハ鎔岩層中ニ埋マリ、恰モ算盤玉ノ如キ形ヲ有スベキナランカ。

三〇 孔底ノ氣溫 第二期噴火ノ終熄セル翌日即チ大正元年十月三十日ハ曇天ナリシガ同日午前九時四十五分外輪山ト三原山トノ間ナル沙漠ニ於ケル氣溫ヲ計リシニ攝氏十三・三度ナリキ、同十時五分三原山北側頂ヨリ少シク下タ手(外方)ニ達セルトキハ氣溫十二・八度ヲ示シ十時十五分山頂ニテモ同ジク十二・八度ナリキ、然ルニ山頂ノ峯ヲ越エテ内側斜面ヲ下リ午前十時二十分字川尻ニ達シタルニ氣溫ハ昇リテ十五・三度トナレリ、更ニ川尻ヨリ噴孔底ニ下リタルガ當時暖風ガ孔内ヲ全體ニ吹キ廻ハセル爲メ、氣溫ハ殆ド等一ニシテ鎔岩面ヨリ二三米ヲ距ツレバ三十八・五度ノ氣溫ヲ示セリ、即チ三原噴孔ハ底ニ熱キ鎔岩層ヲ蓄ヘタル巨大ノ火鉢ノ如キモノナルガ其ノ熱力ハ内部空氣ノ下層ヲ十五・三度ヨリ三十八・五度迄デ二十三・二度ダケ高メタルナリ、勿論赤熱鎔岩ニ密接スレバ一層高氣溫ナルベク、例之バ孔底ニ於テ巨大ナル赤熱鎔岩ノ露出セル場所ニ至リ其レヨリ一米ノ距離ニ迄寒暖計ヲ接近セシメタルニ五十一度ノ氣溫ヲ示シタリ。午後零時十五分再ビ川尻ニ上リテ氣溫ヲ計リタルニ十五・四度ニシテ前時ト殆ド

同一ナリキ。

更ニ四日ヲ經テ十一月三日ニ午後三時二十分頃噴孔底鎔岩層上ニテ氣溫ヲ計リタルニ攝氏二十一・五度トナリ、前回ニ比スレバ十七度ヲ低下シ、平均一日ニ約四度ヲ減少セル割合ヲ示シタリキ。

大正二年九月二十三日午前ニ測定セル氣溫ハ左ノ如シ

午前九時二十分 鏡端下リ口(外輪山上) 攝氏十六・五度

同 九時二十七分 沙漠ノ中央ニテ(風強シ) 十八・〇

同 九時五十三分 三原山頂北側(川尻ノ上) 十六・〇

同 九時五十八分 川尻絶壁上 十六・四

同 十時三十七分 噴孔底 十九・五

即チ第二期噴火ヨリ殆ド一年ヲ經タル後ニ於テモ噴孔底ノ氣溫ハ山ノ頂上ヨリモ約三度半高カリキ。

三一 噴氣孔ノ溫度 三原山噴孔壁西北部ナル斷崖頂上ノ内側ニ蒸氣ヲ吹き出ダセル數個ノ孔アリ、見掛ケノ直徑ハ五六寸内外ニシテ棒ヲ以テ探ルニ深サハ一尺五寸程ニ止マリシガ大正元年十一月三日午前九時半頃噴孔内ノ氣溫ヲ計リタルニ左ノ如クナリキ

孔壁ノ頂點ヨリ内側ニアルモノ、蒸氣ノ噴出弱シ

攝氏二十三・〇度 (同時ノ空氣溫度 八・五度)

孔壁ノ頂點ヨリ外側ニアルモノ、蒸氣ノ噴出強シ

攝氏 三十九・五度 (同時ノ空氣溫度 一〇・七度)

更ニ此ノ附近任意ノ個所ニテ杖ヲ以テ地(砂地ナリ)ニ深サ一尺ノ穴ヲ穿チテ驗セルニ地温ハ三十四度ニシテ噴氣ノ溫度ト大差無キモノ、如シ、尙ホ噴孔壁ノ西部ニシテ「ナウマン」丘ニ接近スル場所ニテモ數個ノ噴氣孔アリ、蓋シ三原噴孔壁西北部及ビ西部ハ從來ヨリモ地中ニ細微ナル裂罅ヲ存セシナルベク、又今回活動ノ結果トシテ新タニ大小ノ裂罅ヲ生ゼルコトモ少ナカラザルベク、且活動ノ中心タル新火口ニ接近セル結果此ノ方面ノ地盤ハ一體ニ高溫度ヲ有スルナランカ、即チ山底活動ノ原點ハ此ノ方面ニモ延長スルモノナルベシ。

三原孔壁ノ南西隅ナル第二最高點ニ近キ處ニモ一個ノ噴氣孔アリ、尙ホ上記セル外中村(清二)博士ハ明治四十五年ノ噴火前ニ大島ノ地理ヲ調査セラレタルガ、三原噴孔壁西側ノ内部、十字岩脈ノ附近ニ一ヶ所「ナウマン」丘最高點竝ニ其南東崖ニ三ヶ所、中央噴孔(噴火前)ノ南縁竝ニ南東縁ニ三ヶ所ノ噴氣孔アルヲ記セラレタリ、此等ノ七個ハ今回ノ噴火ニ際シテ孔底ニ流出セル鎔岩ノ爲ニ覆ヒ匿サレタルガ、要スルニ總計十個ノ噴氣孔ハ三原噴孔壁上ニアルモノト孔底ノ從來ノ火口縁ニ配列セルモノトアルモ、凡テ三原噴孔ノ南西部ト其ガ接續ス

ル孔壁上ニアリテ、第二節ニ記セル大島ノ北東、南西對角線ヲ成ス弱線、即チ火山脈ト一致スルモノナルガ如シ、斯カル地區ニ於テ今回大噴火ヲ發シタルハ自然ノ順序ヲ示スモノニシテ、將來ノ活動モ此ノ方向ニ於テ發展スルモノナランカト想像セラル。

「ナウマン」丘上ノ裂罅 第二期噴火後ニ實見セルニ「ナウマン」丘上ニハ數個ノ裂罅アリ、幅數寸乃至約一尺ニシテ、内ヨリ多少蒸氣瓦斯ヲ噴出セルガ、大正二年九月二十三日午前十一時十五分頃ニ驗溫器ヲ挿入シテ其ノ溫度ヲ計リタルニ攝氏八十二・五度ニシテ、翌二十四日午前十一時頃ニ再ビ驗測セルニ同ジク八十二・五度ナリキ。中村博士ノ調査ニヨルニ前時モ「ナウマン」丘頂上ニ一個ノ噴氣孔アリ、明治四十年八月十二日午前十一時頃、寒暖計ヲ挿入シテ驗測セラレタルニ其ノ溫度ハ攝氏五十六・五度ニシテ同月二十日午後二時頃ニモ大差無ク五十六・〇度ノ溫度ナリシト云フ。今第一期、第二期ノ噴火ノ爲メ「ナウマン」丘ハ少ナクモ數「メートル」ノ厚サ迄ニ拋射セラレタル岩屑、鎔岩塊ノ爲メニ埋メラレタルベケレバ、其ノ餘熱ニヨリテ同丘上ノ裂罅ヨリ、前記セル如ク、八十二・五度ナル高熱ノ蒸氣瓦斯ヲ吹き出ダセルナランモ知ル可カラザレドモ、或ハ寧ろ噴火ノ結果トシテ深キ下層ヨリ高熱ノ蒸氣瓦斯ヲ直接ニ

送出セルモノナランカト考ヘラル。

第七章 大正二年一月ノ小活動及ビ

其後ノ狀況

三三 一、月、活、動、概、況、 今回ノ小活動ハ一月十四日ヨリ次第ニ始リ、十八九日頃ニハ既ニ孔底ノ粗ボ中央ニ當リテ一小火丘ヲ作り盛ニ鎔岩ヲ噴出シタリ、初發ヨリ十日間ヲ經テ同月二十五日ヲ以テ終結シ翌二十六日ニハ既ニ靜穩ニ歸シタリ(第三十六圖)要スルニ第二期噴火即チ前年九月十月ノ大活動ノ餘響ニシテ、其ノ際噴出セル孔底多量ノ鎔岩層ガ著ルシク陥落セルニ伴ヒタル變動ニシテ、第一期噴火即チ明治四十五年三月四月大活動ノ餘響トシテ同年七月下旬ニ發セル陷落、噴火ノ變動ト全ク其ノ趣キヲ一ニセリ、此ノ小破裂ハ第一期噴火ヨリ約三ヶ月後ニ發セシガ、今回ノ變動モ亦タ第二期噴火ヨリ約三ヶ月後ニ起リタリ。

次ニ錄スルハ調査ノ爲メ大島ニ出張セシメタル本會助手加藤常次郎ノ報告(摘要)ナリ。

今回ノ活動ニ就キテ清水大島元村村長ノ談話ニヨルニ今回ノ活動ハ一月十四日ヨリ遠雷ノ如キ鳴動ヲ起シ元村ニ於テモ盛ンニ戸障子ヲ振動セシムルニ至リ四、五日ヲ經テ鎔岩

ノ噴出ヲ始メタルガ如シ、十九日ニ登山視察セル際ニハ孔底ノ殆ド中央部ニ當ル新火孔ヨリ鎔岩ヲ盛ンニ噴出シ居タルガ、噴出ノ模様ハ一回毎ニ先ヅ地下ニテ猛烈ナル鳴響ヲ起シ須臾ニシテ火孔ヨリ眞紅ノ鎔岩ニ黑色ノ岩塊ヲ交ヘテ五、六百尺モ高ク噴キ上グルモノニシテ其音響ハ第一期以降數次ノ三原山活動ノ場合ヨリモ非常ニ強クシテ火孔壁上ニ於テ普通ノ音響ニテハ談話スル事能ハザル程ナリキ、且ツ孔壁上ニ於ケル震動頗ル強カリシカバ思ハズ後遼リスル程ナリキ、其後二十四日頃迄ハ元村ヨリ望見スルニ夜ニ入りテ時々山頂ニ夕陽ノ如キ反照ヲ爲シ居ルヲ認メタリ、二十五日ニ小學校生徒等ガ登山セシトキモ尙ホ噴火ハ繼續シ居リタリト云フ。

然ルニ二十六日午後一時頃余ガ登山セシ時ハ噴火ハ全ク鎮靜シ、地動モ殆ンド感ズル所ナシ、唯ダ坑内大森山(第二期岩屑丘)ヲ中心トシテ孔底ガ約十五米陷落シテ段違ヒヲ生ジ其上段ノ縁邊ニ於テ噴烟盛ンナルノミナリキ。

三三 大、正、二、年、九、月、ニ、於、ケ、ル、狀、況、 大正二年九月二十三日乃至二十六日ニ大島噴火孔ヲ視察セルガ、其狀況ハ同年五月ニ於ケルト大差ナシ、即チ第二期岩屑丘(大森山)内側ノ缺陷、鎔岩「迫持」隧道ノ存在、「ナウマン」丘及ビ第一期岩屑丘(中村山)ノ